世相講談

山口瞳

世相講談

山口 瞳

文藝春秋刊

第三世相講談

昭和四四年九月二五日　第一刷

定価　四五〇円

著者　山口瞳

発行者　樫原雅春

発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三
TEL 東京（二六〇）一二一一
郵便番号　一〇二

印刷　大日本印刷
製本　矢嶋製本

©1969　Hitomi Yamaguchi　Printed in Japan

目

次

太閤持ち……七
影を売る男……二〇
伊豆の白梅……三五
青　蛙……四八
あとの半分……六三
親方あ　宗十郎……七八
蔵のなか……九三
車宿の徳……一〇九
女　優……一二五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

金色夜叉……一四〇
『夢の丘』奇談……一五五
芸者と茸……一七〇
風流戦法……一八三
親指の唄……一九六
暗闇で鰐……二一一
天国には棲めない……二二六
風花散る里……二四二
落穂抄……二五八

装幀・カット　柳原良平

第三 世相講談

太閤持ち

I

「あら、鳥渡いと、どうしたの。珍奇しいじゃないの」

ある出版記念会の帰り。

小説家の高瀬文造、ふらふらっと一塊りにくっついてきちまった。中心に出版社の二代目社長、流行作家がいて、評論家、新聞社学芸部員、編集者、非流行作家などがいる。なんとかいうカメラマンもいる。

むこうにすれば誘ったつもりはないというかもしれない。こっちからすれば誘われたことになる。

「さあ、どっか、出ましょうか……」

二代目社長が言ったときに、高瀬と、目と目があった。そのとき、はっきりとウインクした。むこうからすれば、ちえっ、あいつ、いたのかという驚きの瞬きであったのかもしれない。こっちからすれば、よう、嬉しいな、あなたも来ておられたんですか、さ、ご一緒にどうぞどうぞと受けとれる。まあ、どっちでもいいや。という訳でついてきちまった。

もっとも、いまならば、外套着てベレー帽かぶって、つまり帰り支度をして、カタマリのうしろでニコニコ微笑って佇っていれば、たいていはお涙れを頂戴できる。高瀬な

ぞは会費の二千円のなかにそれも含まれていると考えている。電車で往復二時間もかかるんだから、それがなけりゃ割が合わない。

「会費だけは飲むぞ！」

心中、かたく期しているのであります。

「あわよくば、二次会、三次会……」

はじめからその気なんだ。

なかには、その会費さえ払わぬ人もいる。それを我も許し、人も許しているんだから文壇というのは妙なところ。住みいい所なんです。あの人は仕様がない。それで通っちまう。蚤ならず、だからあの人は立派なんだという声さえ囁かれる。だからして絶対に酒場の勘定は払わぬ。それで押し通してしまえばよい。

この高瀬という男、流行作家ではない。非流行でもない。いまや、升込が厖大になっているから厳密にいえば、みんな流行作家なのだ。売れないのは売らないだけの話。

ひところ、十万円の水揚げがあればプロだと言われた。一枚千円の稿料で月産百枚。仕込みがかかるから、五万円の収入でしょう。この稿料が漸次よくなってきた。そこへ、PR誌やら講演会がある。ラジオ・TVの出演がある。どうかすると、大学の文化祭の余興、町内会のお祭りに文士の一席というのもあるし、なんとかコンテストの審査員というクチがかかってくる。従いまして、時々、週刊誌に頼まれるようになれば、昔とくらべれば、いっぱし、流行作家でしょう。誰某が銭に困窮っているという話はきかれなくなった。高瀬というのは、ま、そういうひと。

四十二歳。目立って後頭部が薄くなった。従って……。

「ああら、センセ。お久しぶり。さあ、どうぞどうぞ」

これに弱い。

銀座の一流酒場。がいしてこれが地下になっている。先きに立って降りるというと、禿頭の隠しようがない。

ちかごろ、デパートなんぞで、下りのエスカレーターというのが出来やがった。これだと否応なしに数秒間の凝視を浴びることになる。逃げられぬ。

独逸人なんかは二十代のツルッ禿げがいるという。日本人が子供扱いされるのはそのためだ。ああ我もし独逸人なりせばいかばかりの感が濃い。いっそのこと、早く薬罐頭になっちまえばいいんだが、そうもいかない。狡賢い金貸しか頑固な代書屋というスタイルでストップしちまった。これじゃあモテルわけがない。若い女性はどうして白髪に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

味方せんとするのか。
「どうしたのよう。なにマゴマゴしてんのよう……」
「はいはい。ただいま」
どっちが客だか、わけわからぬ。
ドア・ボーイが扉をあけるというと、ムッとする人熱れ。喚声と嬌声。音楽。いつに変らぬ繁昌でございます。
「わっ！」
「だいじょぶよ。さ、早く早く」
「いっぱいじゃないか」
「平気だったら、ねえ、ブンちゃん」
ぴったりと抱きつくようにする。そうされれば悪い気はしない。
「よしよし。しかし、ブンちゃんはよしとくれよ。出羽嶽じゃねえんだから」
満員です。
この一流酒場という所、流石に訓練がゆきとどいておりまして、高瀬のような、どっちかといえば有難くない客でも大事にする。そこがまあ見識というもんですね。二流とは大きに違う。決して有名人やら金持ばかりを有難がるわけではない。
「俺は、カウンターでいい」
「まあそう言わないで」
どこにどう隙があるのか、ボックスに案内しようとする。
「カウンターが好きなんだ」
その言は満更、嘘じゃない。通りがかりのホステスがオッパイをおっつけてくる。あるいは下腹をつきだしてくる。ボックスにいたんじゃ落ちつかない。どうせ御馳走になるんだ。旦那にはなれぬ。
で、カウンターに坐る。おかげで、さっきのカタマリとははぐれちまった。するというと、俺の勘定はどうなるんだ。いずれにしても落ちつきのなさに変りはない。どうしたって半端な稼業だ。どこへ行こうと、どこに坐ろうと遣瀬無さがつきまとう。
えい、ままよ。硬軟両用で、ストレート、ちびちびやろう。
パーティの跳ねたあとの九時から十時半の銀座の酒場の混みようといったらない。今日は財界でも一件あったらしい。
芋を洗うようなんというが、とても銭湯の比ではない。

女性はみんな駈足だね。左様、朝の魚河岸かヤッチャ場のよう。これがすべて人間関係がいり組んでいるから大変だ。

「あら！」

「……よう」

「どうしたの？」

「それが……」

「ウヒヒでね」

「へえ」

「失礼……」

それで、いなくなっちまう。

政界、財界、学界、芸能人にジャーナリスト。いずれも見た顔ばかり。近頃はこれに外人が加わる。

この有名人というもの。実物を見ると、チッチャイので驚くでしょう。写真だとかTVだと大きく見える。実物はちいさいのです。従って、もし写真で見ても小さいと思ったら、実物は侏儒だな。

かりに、ひとつの基準をバレーの金井克子にとるとしよう。このひと、グラマーということになっている。とんだり跳ねたりのモダンバレーだし踊りがうまいから大きくみえる。しかるに実物は、かなり小さい。ま、可憐という大きさ。日本女性として、普通というよりは、やや小柄の感じ。もしそれ、TVを見ていて金井さんより小さい女がいたら、チビだと思ってよい。金井さんとならんで、首ひとつ低い男がいたら、侏儒にちかいと思っていただきたい。

満員。煙草のけむり。歌と音楽。キャアという声。酔っぱらいの饒舌。土産話。参院選挙と万国博。能書。口説。朝鮮人参の効用。愚痴。御意見。挨拶。紹介。何やら外国語。抱擁。ボーイさん、ツウシボ。笑声。電話。あら帰っちゃうの。廊下とんび。席が入り乱れ、侏儒が乱舞する。どうもどうも。

「テクノロジーの時代なんだ」

「エコノミック・アニマルでしてね」

「だからプレッシャー・グループが」

「要するに馬鹿が天下を取ってるの」

「日本人がホモジーニアスということ」

「私はウルトラ・コンサーバティブ」

ひょいと見ると、さっきの連中。なかの一人が手招きして、時を得顔の高笑い。

「おうすッ！」

高瀬は腹の底から感謝している。兎に角、脚光あびた人

たちがガチャガチャやってくれるのでなければ、こっちへお鉢が廻ってこない。おこぼれで生きている。聞けばまだまだ週刊誌が何誌か創刊になるという。当分は喰えそうだ。嬉しくなって投げキッス。

「ねえ、高瀬さん。すみませんけど、つめてくださらない？」

だんだんに奥のほうへ。

II

初めに坐ったときに、目が合って、むこうから頭をさげた。よく見る顔なのだ。

五十歳ぐらい。わずかに残った毛髪を、ていねいにわけている。恰幅がいい。やわらかな物腰。

その酒場へ来れば必ず顔があう。そこだけじゃない。一流酒場へ行けば、まず会える。

それだけならいいけれど、いつでも一人ぼっち。カウンターの奥で静かに飲んでいる。

「ねえ。あのひと、だれ？」

「え。あのひと、ふふふ……」

きいてみても答えてくれない。

高瀬は一流会社の社長と睨んだ。並大抵のお勘定ではないはずだ。三十万、いや五十万円はかかるだろう。

それにしても誰も挨拶しない。ホステスもめったに近寄らぬ。

ずんずん奥のほうへ寄せられて、とうとうその男と並んじまった。

「しばらくでしたね」

「こんなところ、めったに来られませんからね」

「そんなこともないでしょう」

「だって……」

「出版記念会のお帰りですか」

「……？」

「私もそうなんですよ」

男は高瀬の胸を指さした。

「あ。いけない」

会費とひきかえに渡された造花がついていた。三色ボールペンに花をつけたもの。

「盛会でしたね」

「……失礼ですが、文壇関係の方ですか」

「いやいや」

「すると、今日の会に関係のある……」
「知りませんよ、あのひとは……」
ストールを廻して中央を見る。いつのまにか、本の著者が来ている。
「……どういう御関係で？」
「ふっふっふ」
薄気味がわるい。物に動ぜぬという気配。あるいは会場となったホテルか、バー関係の人間かと思ったが、それは訊かれぬ。
「よくお目にかかりますね」
「え？」
「そう言っちゃなんですが、大変な御勘定になるでしょう」
「……」
「毎日、銀座で飲んでいらっしゃるんですか」
「ええ、まあ……」
いったい、なに奴？　二人ならんだそこだけが、変にひっそりとしてしまう。
「二、三軒廻られたら、一万円以下ってことは考えられないな」
「とてもとても。そんなにお金はありませんよ」
男は悠々と水割りを追加した。
「しかし……」
「これが仕事ですからね」
「……」
「仕事だと自分では思っているんです」
「お仕事？」
「会社の連中は何もわかっちゃいないんです。けっして、よくは言いませんよ。ええ、まあ、どんなに働いたって、私がどんなに身銭をきって働いたって、きこえてくるのは悪口だけ」
「そうしますと、会社員ですか」
「もちろん、そうですよ」
「……」
「専務はわかっていてくれるんですよ。あとは会長ぐらいですね」
胸の隠しから名刺を出した。五東物産株式会社総務部となっているが、部長ではない。
「わたくしは……」
「いや、知ってますよ。高瀬文造さんでしょう。拝見して

ます」
「……」
「妙なポストでしてね。一所懸命はたらけば働くほど獣なことを言われるんです。誰もわかってくれない」
「誰もって言ったって」
「今日は私は、研究に行ったんですよ。ま、勉強ですかな、ふっふっふ……」

III

「宴会屋さんなんて言われてますがね」
渋谷にちかい呑み屋だった。男は高級酒場のカウンターにいても似合っていたが、小さな呑み屋に坐っていても不思議におさまる感じだった。この男の唇は盃の形をしている。
「宴会屋？」
「そうですよ。このごろは、パーティばかりでね。特に暮は多いんです」
「宣伝になるからでしょう」
「そうなんです。それに、社内の冠婚葬祭をいっさい取りしきっているんです。悪口を言うくせに、いざとなると私のところへ頼みに来るんですからね」
「そんなに忙しいんですか」
「社内だけならいいんですが、取引先きのパーティも頼まれるようになりましてね」
「取引先きといったって五東物産じゃ大変でしょう」
「主なところだけで、ざっと百社はありますからね」
「そう言われても見当がつきませんが、どうして社内で評判がわるいんです」
「社内だけじゃありませんよ。頼まれた会社のひとでも必ず悪く言う」
「どうして？」
「うまくいったってケチをつけるんです。失敗したらボロクソですよ。赤字が出るとお前の責任だっていうことになる。言われたって責任はとれませんよ。たいへんな額になりますからね」
「そうでしょうね」
「要するに組織からハミ出しているんですよ。組合も私の仕事は認めていないわけです。無くたっていいポストなんです。しかし、頼まれたら断れないんです。社内もそうですし、取引先きなら、むろん、そうです。誰かがやらなく

てはいけない」
「要するに幹事なんだな」
「まあ、社内の宴会とか、社員旅行の幹事なんかはやりませんがね」
もっとスケールが大きいのだろう。
「専門家としてはね……」
「威張ってるわけではありませんけど」
「しかし、毎日、銀座で飲んでいるというのは、どうも……」
「……」
「それが仕事だっておっしゃったでしょう」
「ほうら。あなただってそう思うでしょう。タネをあかしますとね、私は、どこの酒場にも、自分のウイスキーを置いてあるんです。こんなこと誰にも言ってませんがね。それも特級じゃなくて一級です。みっともないから、ロイヤル・ハウスホールドという超特級のウイスキーの瓶につめかえてあるんですよ」
「実はそれで驚いたんですよ。あれは、ジョニ黒より高いですからね」
「なに、そうじゃない。どこのホテルにも置いてあるんです」
「酒のことはわかりましたが、毎日、御出勤というのは」
「それで困ってるんです。いや、結局は女のことなんですがね」
「……」
「いまホステスの相場は、六時から八時まで借りるとして五千円なんですね。もちろん、銀座の一流バーの話ですけれど……。それでなければやっていかれないことがわかっているんです。しかし……」
「高いもんですね」
「しかし、私は、三千円以上でやったことがないんです。それ以上渡したことがない。それを知っているから、私に頼んでくるんですよ」
「ほう」
「それってのも、マダムが洋行するとなれば羽田まで送りに行く。誕生日には花束を持ってゆく。マダム代理が入院すれば見舞にゆく。ま、馬鹿な話ですよ。相手はせいぜい三十歳までの若い女ですからね。しかし、結局、それが役立ってる」
「酒場で見張ってるわけですか」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com